全代会の広報誌

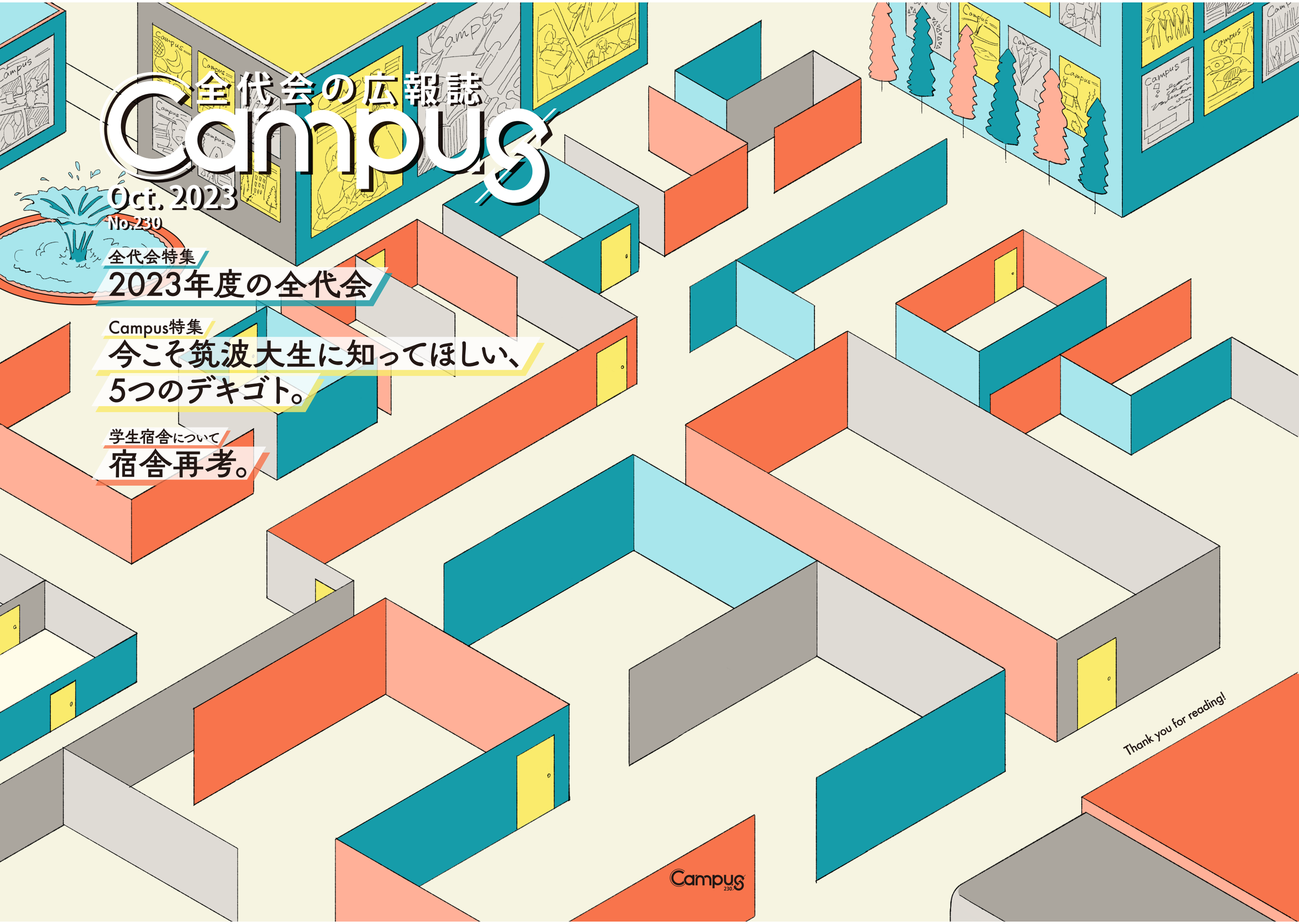
Campus

Oct. 2023
No.230

全代会特集
2023年度の全代会

Campus特集
今こそ筑波大生に知ってほしい、5つのデキゴト。

学生宿舎について
宿舎再考。



2023年度の全代会

令和5年5月、筑波大学に全代会あり

（林 凜太郎）

長は調査委員長を、江波戸副議長は広報委員長を務めていた。また、菊田副議長は総務委員会の情報部門長ならびに情報処理推進特別委員会の委員長であった。今年度の議長団は3年生以上から構成されており、経験豊富なメンバーが揃う。今年度の全代会について議長団3人に会談してもらった。（川島）

全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議（以下、全代会）の第1回本会議にて議長団選挙が行われた。議長には林凜太郎（社会工学類3年）、副議長には江波戸憧音（情報メディア創成学類3年）と菊田一真（情報科学類4年）が選出された。昨年度、林議

2023 年度議長 林 凜太郎

議長団立候補の理由

・どうして議長団に立候補したのかを教えていただきたいです。

菊田：僕はやりたいことがあったからですね。委員会にとらわれない活動を進めたいとか、会計制度を整えたいとか、全代会全般に関わる大きなことをやりたいというのがあって。そこまで大きなことをするのであれば、相応の責任と立場が必要なので、立候補しました。

林：そもそもの動機として、昨年度は主体性を持って行動する人を育成できなかったという反省があります。また、全代会においてあまり良い結果を残せていない感じがあったのが大きいです。全員が全代会に残り、主体性を持って動くような組織を作りたいと思うようになり、立候補しました。

江波戸：僕には、全代会を広報によって大きな存在、頼れる存在にするという目標があって。その目標を達成するためには、全代会全体を見渡せる副議長というポジションで、広報すべきことを拾い上げていく必要があると思い、立候補しました。

菊田：ある意味では僕と江波戸は、自分が所属する委員会をより活発にするためにというか。僕だったら総務委員会と情報処理推進特別委員会だし。

林：僕は全代会を組織として上手く回る組織にしたいというのが強いですね。

江波戸：僕はよく全代会の各委員会を身体で例えるのですが、広報はどうしても顔なので、いかに顔を良く大きくしていくかと考えています。

・小顔ではなく。

全員：（笑）

2022年度の全代会をどう見るか

・昨年度を振り返ってどう感じましたか。

林：全代会の基盤が整っていないなと感じましたね。昨年度のみならず一昨年度も流会をしてしまったので。そのため、まずは基盤の整備から行った方が良いと考えました。昨年度の規約改正によって整備しやすい土壌ができたので、それを生かして進めていくつもりです。

江波戸：昨年度はコロナによる制限が緩和されて、ようやく活動始めという感じでした。やらなければいけないことが山積みだったし、体制は整っていないし、という問題があったので、それの対処で精一杯だった印象です。ようやく今年から本格的に動き出せますね。

林：一昨年度は各委員会で残る人数が少なく止む無く委員長になったという人がいたので、そういう人を無くしたいという思いがあります。今年は自発的に委員長をやりたい、議長団をやりたいという人を増やすのが、私の根っこです。

菊田：基盤を整えるということにもいろいろな面があると思っていて、僕がやりたいのは制度をもっと整えるという、堅い事務方の作業かな。一方、林がやろうとしているのは、いわゆるメンタル面というか、モチベーションというか……。

林：型から入るか、中身から入るか。

2023 年度議長団 議長：林（中央）副議長：菊田（左）・江波戸（右）

全学的に頼りがいのある全代会にしたい

（江波戸 憧音）

菊田：うんうん。ある種まったく違う方向を向いていると言える。そしてまったく違うアプローチで、目指している目的地は同じ「基盤を整える」。

林：出発点は異なっているけど、ゴールは同じだった。

江波戸：広報という面でも、全代会の基盤が整っていないと効果的な広報ができないよね、とは思う。

林：筑波大学に全代会あり、という認識を広報によって培っていきたい。

2023年度の全代会のゴールはどこか

・今年度が終わるとき、どんな全代会になっていることが理想でしょうか。

林：理想は、今年度最後の本会議に全員出席していることですかね。

菊田：本会議もだし、委員会活動も最後まで参加していてほしいな。現在は、学類等代表の任期が終わると委員会活動からも手を引いてしまう人が多い印象がある。

江波戸：「これをやりたいから残る」がベストだけど、それ以外にも何かメリットを感じて全代会に残ってくれるといいな、という感じがします。

菊田：全代会の制度改正を考えている身としては、整備されていない、穴のある規則等は可能な限り無くして来年度に引き継ぎたいかな。

江波戸：確かに。あとは、全代会の活動を組織図に整理できると良いですよね。全代会の対外関係や立ち位置がはっきりしていると、より動きやすいのだろうな、という気がします。それから、全学的に頼りがいのある全代会にしたい。知名度が飛躍的に向上した1年だったね、と言えるようになっていたら100点なんだろうな。

菊田：全代会をもっと学生にとって身近な存在にしたいね。

江波戸：それから、もう少し声が返ってくる組織にしたいです。全代会からの発信に対する意見がもっと届くと、こちらとしても活動への意欲が増すと思う。

林：レスポンスがあると嬉しいからね。

長期的な未来に向けて

・全代会の長期的な未来に、何か期待することはありますか。

菊田：例えば、全代会構成員がやりたいことを気軽に言える空気になっていてほしい。制度を整えたからといって、空気がすぐに変わるわけではないから。

林：やりたいことがあって全代会に入った人たちが不自由なく活動できる全代会になっているといいな。

江波戸：あと具体的なものだと、全代会50周年誌を作るという話もありますね。

菊田：大学院生との関わりという問題もどうにかしたい。現状、院生は全代会に所属できないけれど、それでいいのかと話題にあがることがあるので。学群生や院生、留学生など、筑波大学にはさまざまな人々が存在するけれど、所属にとらわれすぎない組織になればいいね。

・想像していたより議長団3人がうまくバランスを取っているんだなという印象を受けました。

林：本当にそう（笑）

江波戸：とてもバランスが良いというのはかなり感じていて。所属委員会や注意が行き届く委員会も分かれているから、全体を見渡しやすい感じがあるよね。

・そうなんですね。本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

まったく違うアプローチで、目指している目的地は同じ―「基盤を整える」

（菊田 一真）

全代会 | 2023 年度の全代会

2023年の10月1日をもって、筑波大学は創基151年、開学50周年を迎える。その起源は、日本に古くから存在する高等教育機関の一つとして誕生した師範学校にさかのぼり、101年後の東京教育大学の移転を契機に、「開かれた大学」を開学の理念とする新構想大学として筑波大学が開学した。本学は大学改革を先導しつつ、教育研究の高度化、大学の個性化、大学運営の活性化など、活力に富み、国際競争力のある大学づくりを推進してきた。そこで今回は、全代会の広報誌『Campus』を通じて筑波大学の歴史を紐解いていく。（山本）

今こそ 筑波大生に知ってほしい、5つのデキゴト。

1975
『代表者会議広報』が創刊

1985
名称が『Campus』に改称

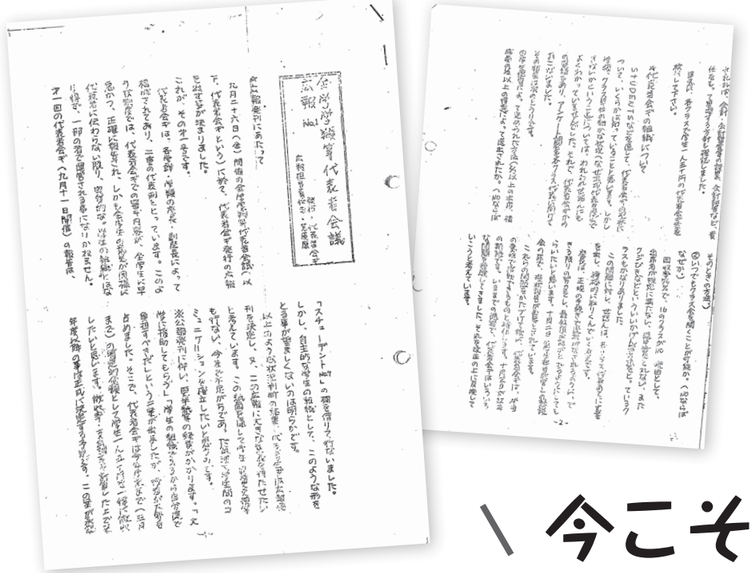
2009
「桐の華」発売
Campus 178号

2003 / 2007
「宗教勧誘」について特集が組まれる
Campus 152, 167号

2013
人工衛星「結」打ち上げ
Campus 200号

Representative Academic Public Relations

代表者会議広報



全代会の広報誌『Campus』の前身である『代表者会議広報』は東京教育大学から筑波大学へと移転した年から存在していた。移転した当初の筑波大学は学生運動の空気が未だ残っており、東京教育大学時代に移転反対運動に関与した学生自治会から刷新された代表者会議（後の全代会）が、学生と大学側の中間で大学の自治に努めていた。特に70年代には学園祭での学生団体の企画をめぐり、両者の間に激しい対立が起きて2度の学園祭中止に発展する。大学学生部が学生向けに発行していた『STUDENTS』が大学側の主張を取り上げるなか、『代表者会議広報』は主に代表者会議の意見や声明文を載せていた。議事録においては、会議内での資料（質問状や抗議文）の全文や議会内での発言、代表者の様子などかなり詳しく掲載している。その他の記事も各委員会からの呼びかけや活動報告が中心であり、文体は硬い。

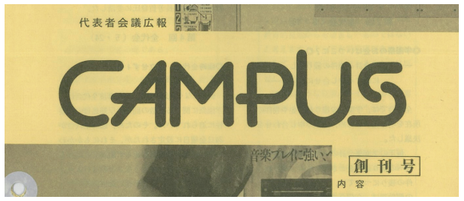
当時の広報委員会は学内の問題についてさまざまな意見を載せたいとしていたが、大学側は公費による出版物である以上、代表者会議の議事録のみ載せるべきだという見解を示した。

当時は学類によって温度差はあるものの基本的に学生の自治精神が強く、『代表者会議広報』が印刷された翌日には、それを元にクラスにおいて議論するのが恒例であったようだ。（勝又）

! 初期Campus

First generation

43号まで全代会の懇親会や会議の情報をまとめて積極的に公開していた『代表者会議広報』であるが、44号からはその名前を現在の『Campus』と改め、新たなスタートを切ることになる。それに伴って、誌面も『代表者会議広報』が行っていた大学との懇談会や会議報告に加え、各学類等の座長団（現　学類等代表）の紹介、学内の問題に対する論説などの学生生活に着目した記事を取り扱うようになった。さらに、学園祭が近づくと団体の企画紹介や交通規制の案内を取り扱うこともあり、『代表者会議広報』時代のものに比べ、誌面にまとめられている記事はより学生の興味に沿った内容になっている。その改名当時の名残が現在も『宿舎祭特別号』などといった形で見て取れることを考えると、全代会の広報誌が『代表者会議広報』から『Campus』へ変化したという事実は注目に値するかもしれない。（篠﨑）



! 桐の華

Kirinohana

皆さんは「桐の華」という筑波大学ブランドの日本酒をご存じだろうか。この商品は研究室と事務組織等が本格的に協力し、研究成果を商品化に結び付けたものだ。『Campus』178号が発行された当時、新聞7紙だけでなくテレビでも取り上げられ、世間の反響も大きく、大学への問い合わせが殺到していたという。

「桐の華」は筑波大学の校章「五三の桐葉型」にちなみ、桐の花から探り出した酵母で造った純米吟醸酒だ。この日本酒ができるまで、桐の花があまり咲かず酵母を採取できなかったり、酒造りに有用な菌種を絞り込むスクリーニングで試行錯誤したりとさまざまな苦労があった。担当していた生命環境系の内山裕夫（うちやまひろお）教授（当時）は、「とても根気のいる作業だった。スクリーニングは恋人探しと同じで、最初は相手がどんなことが好きかを知るのが大切」と語っていた。

「桐の華」誕生の背景には、生物化学や芸術学をはじめとする多くの学問が関わっている。今年度開学50周年、創基151周年を迎える大学に思いをはせながら、一杯飲んでみるのはいかがだろうか。（榎本）

! 人工衛星「結」

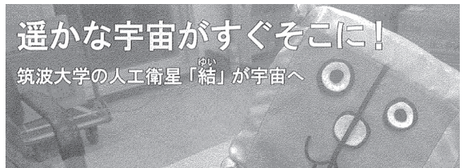
Artificial satellite

「筑波大学の人工衛星『結』が宇宙へ」

こう見出しがつけられた記事は『Campus』200号（2013.12）で掲載された。「結」とは筑波大学発の人工衛星「ITF-1」の通称で、「筑波大学ネットワーク衛星『結』プロジェクト」によって製作されたものだ。大きさは約10センチメートルと、超小型の人工衛星である。

当時、「結」は三つの役割を期待されていた。その三つとは、「結」ネットワークの構築、新型処理装置の動作実証、超小型アンテナの動作実証のことで、このなかには世界初の試みもあるという。これらは従来の課題を解決し、人工衛星から発信される信号の広範囲での利用や、衛星開発の促進、打ち上げの安全性向上を可能にするものだ。

「結」プロジェクトは「結」が打ち上がって終わりではない。今なお、新たな人工衛星の開発が行われているようだ。続報をぜひ期待したい。（榎本）



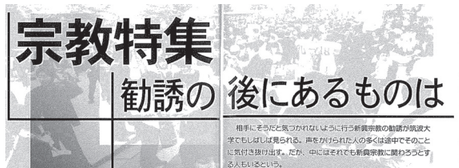
! 宗教勧誘

Religious Activity

宗教勧誘に関する記事は、『Campus』152号と167号で掲載された。過去においても、新入生に対して執拗かつ悪質な勧誘を行う新興宗教団体が、活動していたという。我々はいかにして身を守るべきか、また大学はどのように対応すべきだろうか。

当時は勧誘手口として、最初は優しい先輩のふりをして新入生に近づいて講義やセミナーに連れていき、高価な本を買わせたり参加料を払わせたりするものがあった。このような手口に騙されないためには、相手に付け入る隙を与えずに断る強い意志が必要となる。問題を一人で抱え込まないために家族に相談するのも一つの手だろう。

大学側は、原則として本人自らが解決することを基本としつつ、主に学生相談室で解決のための支援を行うという体制をとっていた。一方で、当時の『Campus』では、このような体制を見直す必要があるという意見もあった。現在では、学生生活課発行の『セーフティライフ』などを通じて悪質な宗教勧誘についての注意喚起がなされている。（近藤）



宿舎再考。

筑波大学には複数の学生宿舎が点在し、現在まで多くの人が学生生活を送ってきた。今回の特集では、かつて宿舎に入居していたOB・OG、現在住んでいる学生、さらに学生生活課に取材を行った。本特集を通じて、今後宿舎がどうなるのか考えてみてはいかがだろうか。（佐藤 遥）

卒業生からみた学生宿舎

――過去から未来をデザインする――

学生宿舎はかつてどのような姿をしていたのだろうか。1977年に入学し一の矢学生宿舎に2年間居住した瀧下芳彦（たきしたよしひこ）さんと、1996年に入学し平砂学生宿舎に1年間居住した野﨑芳恵（のざきよしえ）さんに当時の話を聞いた。瀧下さんが入学した頃は大学近辺にアパートが少なく、宿舎が満室だったという。2人部屋に同学類、同郷の学生と住むことになったと瀧下さんは当時の驚きを回想した。また、野﨑さんは居室に直接サークルの勧誘が来たり、他棟の宿舎に足を伸ばしたりした当時を回顧する。当時の宿舎は現在のようなセキュリティ管理がなく自由に出入りできたそうだ。そのような環境のなかで彼女は2人の友人と出会い、互いに助け合いながら生活していたという。野﨑さんと彼女らの関係は約27年経った今でも続いているそうで、「宿舎で過ごした1年間は『密』だった」と笑顔で語った。

瀧下芳彦さん（左）と野﨑芳恵さん（右）

かつての学生らにとっても思い出の場所であった宿舎は、現在大きな変容を迎えようとしている。「未来社会デザイン棟」が平砂共用棟裏に建設予定であることについて、野﨑さんが驚きを示した。かつて気楽で日常的な人間関係が築かれた宿舎であったのが、これからは起業を希求する学生による上昇志向なコミュニティが形成されることが予想されるからだ。瀧下さんは、「未来社会デザイン棟」が学生交流の拠点を目指していることを受け、宿舎に入居する学生は必ずしも他者との交流を希求しているとは限らないため、多様なニーズに対応していく必要があるのではないかと考えを巡らせた。

今後の宿舎に期待することについて、野﨑さんは建物の改修と美化を挙げ、「宿舎が学生にとって『入居したくない場所』であってはならない」と想いを語った。瀧下さんは筑波大生のキャリア支援に携わっている経験から、学生には「インターネットではないネットワーク」が必要だとまっすぐな瞳で語り、宿舎が留学生や人脈を求める学生の受け口として機能することの大切さを話した。（髙橋）

COLUMN 学生からの声

・一の矢、入居4年目

宿舎に対する不満点は、同じフロアの住民同士のコミュニティが形成されなかった点です。入居者のサポートや大学からの連絡を取り持つコミュニティリーダーが存在しているはずですが、形骸化しているため隣人なのに関わりがないという状況です。このような状況では学生宿舎に住むメリットを享受できていないように感じます。

新しい宿舎ができるのであれば、水回りをきれいにしてほしいと考えます。私は現在未改修棟に住んでいますが、設備は古いままで更新されません。もし可能であれば、建て替えて設備を一新した後は継続的な更新をしてほしいです。

・平砂、入居2年目

私が感じる宿舎の良い点は、キャンパス内にある点と新しいコミュニティができる点です。私の場合、隣人と一緒にご飯を作ったりお風呂に行ったりするほど仲良くなるという、宿舎に住まなければ得られなかった出会いがありました。一方で、改善してほしい点はシャワーやキッチンなどの共用部です。定期的に業者の方が来てくださるのですが、壊れているものが修理されていないことが多いので、そこを改善してほしいです。

・平砂、0年5カ月で退去

宿舎に入居を決めた理由は、後期入試で合格が判明したのが3月20日頃だったためです。地元が遠方だったことからアパートの下見に行く余裕もなく、消去法のような形で宿舎に入居しました。宿舎の退去を決めたきっかけは、収納スペースが十分に取れないことや人を呼べないなどの不便を感じたからです。また、共用部の機能性の低さや衛生環境の悪さも退去を決意した一因です。

遠方から進学する人や経済的に余裕のない人も少なくないと思います。そのような学生にとって、物件探しの手間が省け、家賃や水道・光熱費の安い宿舎という選択肢はありがたい存在だと感じます。一方、あくまで「諸々の事情でアパートに入れない人のための場所」であるとも個人的には感じるため、住みにくさを感じる人もいるでしょう。

学生宿舎リニューアル計画

宿舎リニューアルまでの流れ

現在、筑波大学の学生宿舎は、平砂・追越・一の矢・春日の計4エリア存在する。全68棟、3820部屋あり、約10平方メートルで、トイレ、シャワー、調理場等が共用の学生宿舎がほとんどである。宿舎の入居費は主に宿舎の運営・管理に充てられる。しかし、学生のニーズや時代の変化が影響して年々宿舎に入居する学生の数は減少している。学生生活課の黒岩直行（くろいわなおゆき）さんは「入居する学生数の減少に伴い、修理・保全に充てられる費用も減少し、規模が大きい改修等ができずにいる」と語る。このような状況のなか、2022年に筑波大学は大学債の発行を決定した。使用目的の一つとして「大学債を宿舎のリニューアルに充てる」という計画が発表され、宿舎のリニューアル計画に転機が訪れた。しかし検討の結果、大学債ではなく民間企業の資金やノウハウを利用して公共サービスを提供するというPFI（Private Finance Initiative）方式によるリニューアル計画になる見通しだ。（※後述の未来社会デザイン棟の建設には、一部大学債を活用予定）

宿舎を集約する

「主な計画は、宿舎を集約し、かつ学生のニーズに答えられるように住環境を向上させるリニューアル計画だ」と黒岩さんは話す。宿舎の集約について、現状の計画では、ショートステイハウスとグローバルヴィレッジを除く全ての宿舎を平砂エリアと追越エリアに集約し、リニューアルすることが検討されている。宿舎の総部屋数は変わらない予定であるため、約1900部屋ある平砂・追越エリアに約1000部屋増えることになる。また、平砂共用棟付近に学生の主体性・社会性を育成、学生文化を発信、地域社会・産業界と学生を繋ぐ活動等を目的とした場として、「未来社会デザイン棟」の建設が予定されている。黒岩さんは「集約することで、未来社会デザイン棟の利便性が向上し、学生が支援を受けやすくなる」と話す。しかし、現状でも混雑している大学中心部へのペデストリアンデッキが、集約により一層混雑してしまうという懸念もあるそうだ。

住環境を向上させる

現状の計画では、住環境を向上させるために、各部屋を拡張し機能を増やすことが検討されている。「15平方メートルから20平方メートルを目安とし、各部屋にミニキッチン・シャワー・トイレ・ランドリースペースなどを配置した、ワンルームタイプを検討している」と黒岩さんは話す。一方で、「このような部屋の機能向上によって、掃除の手間が生まれたり、入居費が増大したりといった入居者にとってデメリットも生まれる可能性がある」とも話した。宿舎のリニューアルは既存の宿舎入居者のみならず、現在もアパートに住んでいる学生にとっても魅力的な計画かもしれない。しかし、計画はまだ検討中のものであり、今後も議論が予定されている。（鈴木）

全代会活動報告

令和4年度本会議概要

第7回

『情報処理推進特別委員会の設置について』

承認40、否認0、保留1→可決

第8回

議題1『令和4年度筑波大学学園祭総括報告書について』

承認40、否認0、保留1→可決

議題2『学園祭学生分担金の額及び納入方法について』

承認30、否認5、保留10→否決

第9回

『会計に関する全代会規定の策定について』

出席数が定足数に満たないため、流会

第10回

議題1『学園祭学生分担金の額及び納入方法について』

承認43、否認0、保留1→可決

議題2『会計に関する全代会規定の策定について』

承認42、否認0、保留1→可決

議題3『学生組織改編によるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

議案書の表記に関する修正動議が出され、いずれも承認多数で可決された

議題3—1『物理学類、応用理工学類、知識情報・図書館学類、情報メディア創成学類、医療科学類におけるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

承認40、否認0、保留0→可決

議題3—2『人文学類におけるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

議題3—3『総合学域群におけるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

出席数が定足数に満たないため、流会

第11回（メール会議）

議題1『学生組織改編によるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

議題1—1『人文学類におけるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

承認42、否認1、保留1→可決

議題1—2『総合学域群におけるクラス代表者会議に関する申し合わせ』

承認43、否認0、保留0、白票1→可決

キャンパスグローバル化に伴う全代会の国際化を目的とした海外研修プログラム

日時：令和5年3月8日（水）～令和5年3月11日（土）

○実施内容

全代会は、令和5年3月に海外研修プログラムを実施した。筑波大学では、国際的に開かれた大学へ向けて、学内全組織の国際化が急速に進んでいる。本プログラムは、学生組織の国際化を支援するため、海外協定校の学生組織を訪問し国際化のための知見を共有するとともに、学生間の連携を強化することを目的としている。

本プログラムには、全代会構成員19人が参加した。3月9日にマレーシア科学大学、3月10日にカセサート大学を訪問し、現地学生と互いの学生組織の概要説明や文化紹介を行った。また、学生組織の国際化をテーマにしたディスカッションも行い、有意義な交流となった。

国際特別委員会委員長
山口毅人（やまぐちたけと）（応用理工学類3年）

本プログラムで最も印象に残っているのは、マレーシア科学大学で実施されている「バディシステム」だ。バディシステムは、留学生を現地学生がサポートする、筑波大学でいう「チューター制度」のようなものだ。チューター制度では、1人の留学生に対し1人の学生がサポートにつく。一方バディシステムでは、複数の留学生に対し複数の学生がサポートにつく。現地学生が協力し合うことで、留学生のサポートが手厚くなるという。現在筑波大学のチューター制度では、留学生のサポートだけでなくチューターへのサポートも課題となっている。チューター制度の充実のために、バディシステムを参考に意見を出していきたい。

研修中は英語を用いた会話がほとんどだった。私は英語が得意ではないため不安を感じていたが、完璧な英語が話せなくても活発な議論を行うことができた。留学生との交流に言語面で高いハードルを感じる学生もいるかもしれないが、完璧に話せなくても交流はできるということを伝え、留学生との交流を活発にしていきたい。

全代会令和5年度議長
林凜太郎（はやしりんたろう）（社会工学類3年）

我々は令和5年3月、全代会の国際化や活性化のための意見交換を目的とし、マレーシアとタイにて海外研修を実施した。訪問した大学では、広報活動が非常に盛んな印象を受けた。Instagram等を活用し、学園祭のようなイベントではカウントダウンやイベント紹介、テスト期間には応援メッセージなどを発信するなど、学内での情報発信に努めていた。全代会においてもTwitter（現　X）等を活用した情報発信を行っているが、これまで以上に活発にし、より多くの学生が情報を得られる環境にしたいと思う。本研修を通して全代会の課題点を発見し、解決のために議論できたことは、自分が議長に立候補するという決断に至った理由の一つにもなり、非常に有意義な活動であった。

副学長と全代会構成員との懇談会

日時：令和5年3月13日（月）14時

場所：本部アネックス棟1階会議室

出席：副学長（学生担当、教育担当、国際担当）、ヒューマンエンパワーメント推進局（BHE）次長（教員3名）、学生生活支援室長、学生相談室長、国際交流支援室長、教学デザイン室長、教学マネジメント室長、教育推進部長、施設部長、学術情報部長、学生部長、全代会構成員（陪席）教育推進課長、ヒューマンエンパワーメント推進局（BHE）担当課長、学生生活課長、学生部プロジェクト推進担当課長、学生交流課長

○実施内容

副学長と全代会構成員との懇談会（以下、副学懇）では、令和4年度における全代会の活動報告が行われた。まず、議長団が活動全体について総括を述べ、その後に常任委員会と特別委員会が個別に活動報告を行った。

報告の後には質疑応答の時間が取られた。質疑応答では、令和5年3月に海外大学の学生組織の視察を目的として行われた全代会海外研修プログラム（以下、海外研修）や、学内における留学生との交流について、副学長を中心に構成員との間で活発な議論が行われた。また、新型コロナウイルス感染症に伴い規制されていたトレーニングルームの個人使用や、全代会におけるSNSでの広報のあり方について、構成員と教職員の間で積極的な意見交換が行われた。

懇談会の最後には、各担当副学長による総括が行われた。「海外研修の話から、今後全代会の活動をより効果的に拡大していくためには、全代会構成員をはじめ学生の主体性が必要となることが再確認できた」、「筑波大学のグローバル化を実現していくために、全代会が学生の先陣を切ってほしい」と副学長等が総括した。

全代会研修会

日時：令和5年5月7日（日）11時

場所：3A204（3A212、3A311、3A408、3A305、3A213、3A407も使用）

出席：学生生活支援室長、学生部学生生活課学生生活支援チーム職員（動画での参加）、全代会構成員

○実施内容

筑波大学紫峰会基金の後援を受け全代会研修会が行われた。当会は新入生の親睦と、全代会の活動内容への理解を深めることを目的として毎年開催されている。

今年度はチームビルディングを目的として、委員会対抗アイスブレイクが行われた。このようなアクティビティは今年度が初の実施となる。制限時間内に新聞紙や割り箸などを用いてタワーを作り、紙コップを一番高い位置に乗せることができた委員会が優勝となる。計測の結果、調査委員会が172センチメートルで優勝した。当会の代表を務めた山口毅人は「タワー作りを通して、委員会内の親睦を深めることができたと感じる」と話す。

アイスブレイクの後は、委員会活動や模擬本会議が行われた。模擬本会議では議題として開設授業科目一覧に関する要望と第三エリアの丸善の営業時間延長に関する要望の2点を扱い、構成員は本会議の議事進行等を経験した。

第1回本会議

日時：第1日程　令和5年5月10日（水）18時30分

第2日程　令和5年5月17日（水）18時30分

場所：3A204

出欠：第1日程　出席61人　遅刻2人

第2日程　出席55人

○実施内容

5月10日に第1回本会議の第1日程が実施された。当会では議長として林凜太郎（社会工学類3年）が立候補し、信任投票の結果選出された。また、副議長として菊田一真（きくたかずま）（情報科学類4年）、江波戸憧音（えばとしょおん）（情報メディア創成学類3年）、森望（もりのぞむ）（社会学類2年）が立候補した。競争投票の結果、後日行われる第2日程にて菊田一真と江波戸憧音の決選投票が行われることが決定した。

第1日程後、副議長立候補者3人より連名で「令和5年度副議長選挙の流れについての提言書」が提出された。この提言は、規定には「決選投票の際に過半数の信任を得る必要がある」という記述はないと指摘し、「決選投票の際に得票数が多い候補者を副議長に選出すること」を求めるものであった。河野美羽（かわのみう）前議長により、提言は受理され決選投票において適用された。

5月17日に第1回本会議の第2日程が実施された。菊田一真と江波戸憧音の決選投票の結果、江波戸憧音がより多くの信任を得たため副議長として選出された。また、菊田一真と森望の決選投票の結果、菊田一真が副議長として選出された。

第1日程

議長選挙

【立候補者】

林凜太郎（社会工学類3年）

【投票結果】
信任　59
保留　4
不信任　0
→全代会構成員過半数の信任を得たため、林が議長に選出された。

副議長選挙
【立候補者】
菊田一真（情報科学類4年）
江波戸憧音（情報メディア創成学類3年）
森望（社会学類2年）
【投票結果】
菊田　31
江波戸　18
森　11
→全代会構成員過半数の信任を得た候補者がいなかったため、得票上位である菊田と江波戸による決選投票が行われることとなった。

第2日程
決選投票（菊田、江波戸）
【投票結果】
江波戸　29
菊田　26
→江波戸がより多くの信任を得たため、副議長として選出された。また、規定に基づき菊田と森による決選投票が行われることとなった。

決選投票（菊田、森）
【投票結果】
菊田　37
森　17
→菊田がより多くの信任を得たため、副議長として選出された。

学長と全代会構成員との懇談会（茶話会）

日時：令和5年6月7日（水）18時30分
場所：1A棟食堂
出席：学長、副学長、その他教職員等、全代会構成員、学園祭実行委員会構成員、スポーツ・デー学生委員会構成員、芸術系サークル連合会構成員等

○実施内容
学長と全代会構成員との懇談会（茶話会）が6月7日に実施された。学長を含む教職員等と全代会構成員をはじめとした学生らが、筑波大学で生じている学生生活上の問題点や今後の展望について話し合った。
全代会からは各委員会の委員長が今年度の活動方針等について報告を行ったのち、議題1『開設授業科目一覧の配布形態について』、議題2『課外活動団体における空調設備の使用について』という二つの議題を提出した。
議題1では、開設授業科目一覧の紙媒体での配布を廃止し、PDF化した点についての議論が行われた。全代会が全学に対し事前調査を行ったところ、調査に回答した学生のうち約8割が紙媒体での開設授業科目一覧を望んでいるという結果を得ていた。加藤光保副学長（教育担当）は紙媒体での配布が廃止された理由として、紙資源の削減を挙げた。紙媒体で配布しても年度初め等の限られた時期にしか使われず、使用後は膨大な量が廃棄されているという。また、議題に付随して「一部抜粋という形式で開設授業科目一覧の紙媒体を配布することは可能か」という質問があがり、これに対し加藤光保副学長は「学類によってはガイダンスの資料として、学生たちが必要であろうと思われるページのみの配布を行った。しかし、これはかえって労力がかかるため、全学で実施することは厳しいと思われる」と回答した。
議題2では、教室へのクーラー等空調設備の設置や熱中症対策について話し合われた。課外活動団体が借りる教室では、空調設備が設置されていないことがある。また、教室の冷暖房の切り替えが済んでいないことがあり、課外活動中に熱中症になるリスクが高い。筑波大学の冷暖房装置は、6割以上が集中管理されており、調整や冷暖房の切り替えに時間がかかるそうだ。奈良哲副学長（財務・施設担当）は「この問題の解決については大学側でも話し合っている。本学の設備は全体的に老朽化しており、同時にすべてを改善することは難しい。予算も限られているが、一つずつ改善していく予定だ」と回答した。「冷水器やカップ式の自動販売機を設置して、熱中症等の対策をできるようにしてほしい」との要望には、学生部学生生活課主幹の黒岩直行さんが「筑波大学では自販機は5年ごとに契約が更新されている。今年度は契約更新の年度であるため設置を検討したい」と回答した。
その他、議題以外にも加藤和彦副学長（総務人事・情報環境担当）による教室申請の電子化に関する進捗報告や、情報処理推進特別委員会から課外活動団体統一プラットフォームの開発についての話題が出された。以上のように、学生と教職員等が意見交換を行い、有意義な会となった。

第2回本会議

日時：令和5年6月14日（水）18時30分
場所：（対面）3A204
（オンライン）Microsoft Teams
出欠：出席54　遅刻1　早退1
参考人　沼田航

議題1『学内ペデストリアンの補修に関する要望』
修正動議が出され、承認多数で可決された。
【採決結果】
承認：46
否認：1
保留：6
→承認多数で可決された。

議題2『企画戦略特別委員会の設置について』
修正動議が出され、承認多数で可決された。
【採決結果】
承認：49
否認：1
保留：2
無効票：1
→承認多数で可決された。

議題3『令和6年度学園祭開催に関する要請』
【採決結果】
承認：54
否認：0
保留：0
→全会一致で可決された。

議題4『新入生歓迎特別委員会設立について』
【採決結果】
承認：53
否認：0
保留：0
→全会一致で可決された。

○議題について
議題1では、実地調査で明らかとなったペデストリアンデッキの危険箇所改修の要望について、審議を行った。質疑応答では、資料の写真や危険度の基準の不明確さが問われ、修正動議が出され、その修正動議をもとにした要望書を提出することに決まった。
議題2では、企画戦略特別委員会の設置について審議された。同委員会は、昨年設置されていた前身の企画・戦略特別委員会の引き継ぎや、委員会を横断する業務を所管する組織の発足を目指すものだ。「所管する業務を各委員会へ確実に継承すること」を設置目的に加える修正動議が出され、成立した。採決の結果、本議題は可決された。企画戦略特別委員会の設置期間は、令和5年7月1日から令和6年3月31日までとなる。
議題3では、令和6年度学園祭開催に関する要請についての審議が行われた。結果、学園祭の開催期間を11月2日（土）から4日（月）とし、片付け日を5日（火）として休講にすることを所管の副学長に要請することが決まった。
議題4では、新入生歓迎特別委員会の設置についての審議が行われた。同委員会は例年学類等の新入生歓迎団体への活動支援、学生宿舎の新規入居者の支援に取り組んでいる委員会であり、その重要性と例年の再設置の慣行などから委員会の期限なしの設置を求めたもので、採決の結果、可決された。

制作部長より
223号にて、とんでもないパロディ後書きを残した私ですが、今号で制作部長を終えるようです。長い間、お世話になりました！　夏の暑さにも負けるひ弱な精神とともに、イラレを教えたり、手助けしたり、といった模範的行いはほとんどできませんでした。むしろ何かと助けられてばかり、後輩に頼りまくる先輩といった形で幕を閉じます。広報委員会のことを考えてくれる頼もしい後輩たちが居てくれて幸いでした。そんな後輩たち、延いてはこれから先の制作部員へ、体調にはくれぐれも気を付けてください。カゼひくなよ。
（江波戸憧音）

編集後記
全代会の広報誌『Campus』を読んでくださり、ありがとうございます。編集長の菅原です。今号は特集3本立てでお送りしました。一つでも多く皆さんの興味に刺さる内容がお届けできていたら幸いです。また、これまでよりも活動報告を充実させました。全代会がどんな活動をしているのか、公式HPも合わせてご覧ください。
さて、私が編集長として『Campus』に関わるのは、今号が最後となります。ここまで発行を続けてくることができたのは、委員の仲間、そして読者の皆さんのおかげです。ありがとうございました。今後とも全代会を、全代会の広報誌『Campus』をよろしくお願いいたします。　（菅原　由乃）

【お詫びと訂正】
『Campus』229号4、5ページの筑波キャンパス学食マップ内「筑波デミ」の写真が「スープファクトリー」のものとなっておりました。申し訳ありませんでした。全代会ホームページにて、修正版を公開しておりますので、そちらも合わせてご覧ください。

Campus
全代会の広報誌
No. 230　Oct. 2023
2023年10月1日発行
編集長　菅原　由乃
発行人　篠﨑　健太
表紙デザイン　髙塚　絢湖
編集委員　菅原　由乃　江波戸憧音　熊谷菜々恵
和田　優斗　甘利康志朗　川島淳一郎
大谷　美琴　篠﨑　健太　佐藤　凌
勝又　玲　髙橋　愛果　近藤あかね
髙田梨々子　水野　舞優　山根　千幸
髙橋　伊織　松本　英愛　小林慎之助
岡本　翔太　鈴木　史麿　榎本　陽子
山本　詩温　髙塚　絢湖　佐藤　涼穂
山田　美浩　太田　祈心　山下　大樹
発行　全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議
広報委員会
https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/
(zdk@stb.tsukuba.ac.jp)